

第17節 いか・たこ漁業

1. いか漁業

1) 沿革

縄文期の貝塚からコウイカ類の甲羅片が相当数出土していることから、イカ類の漁獲の歴史は新石器時代まで遡ると考えられている。奈良時代の『出雲風土記』にイカの名が現れ¹⁾、平安時代の『延喜式』には朝廷への献上品として重要な産物であったと記されている。またイカは全国至る所で漁獲され、古来イワシ、ニシンに次ぐ重要な水産物とされた。

本県では16種のイカが確認されている²⁾。即ちヤリイカ、ケンサキイカ、ウイジンドウイカ、アオリイカ、スルメイカ、ソデイカ、コウイカ、ウスベニコウイカ、ウデボソコウイカ、カミナリイカ、シリヤケイカ、ハナイカ、ホンツメイガ、アカイカ、スジイカ、トビイカである。

漁業としては古くは波留浦の夜釣、甑島平良のいか釣、西方村のとんきゅう釣、イカの餌本釣の記録がある³⁾。いか漁業としては各種の定置網が最も一般的に行きわたった漁法である。ほかにもいか釣が多いが、夜間、昼間の操業、餌を付けるいかなや擬似針により、一本釣、連結釣などの方法がある。

特に本県は「薩摩のミズイカの餌木釣」の名で江戸時代から有名であった。この餌木はクス、クサギ、アマキ、タラ、カンランなどで作る。背面または側面に、樹皮をむいたままの木肌をだす。形は種々で、表面を黒く焼いて水に浸し、さらにとろ火にかけ光沢をだす。水面に入るとエビが泳いでいる状態になり、イカがさわって重みがくると、引き揚げたり緩めるなどのこつで合わせて釣獲するのである。

このほかイカの巣曳網やいかかご網などがある。

現在用いられている1本の釣り糸に複数の擬似針が連結された形のいか釣具が使われ始めたのは1951(昭26)年ごろである。その後1958(昭33)年に手動いか釣機が、1964(昭39)年に現在一般的な自動いか釣機が開発されたが、本県では普及が遅れている。

2) いか漁業の技術発達

(1) いか釣具 県内で用いられている各種の釣漁具を図示すれば図1の通りである。

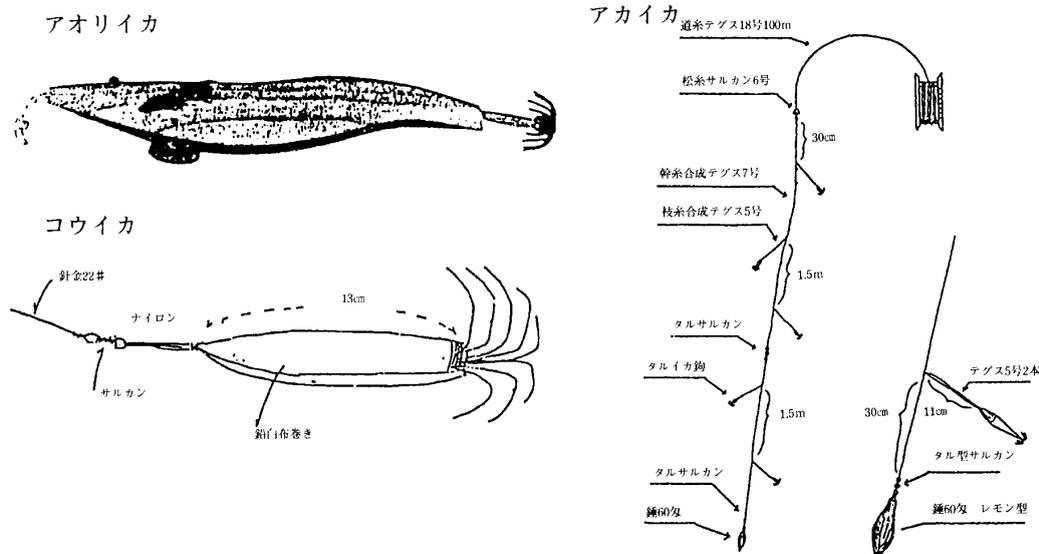


図1. いか釣漁具各種

(2) そでいか釣

漁具の構造

ア) 漁具の構成 奄美大島海域の例

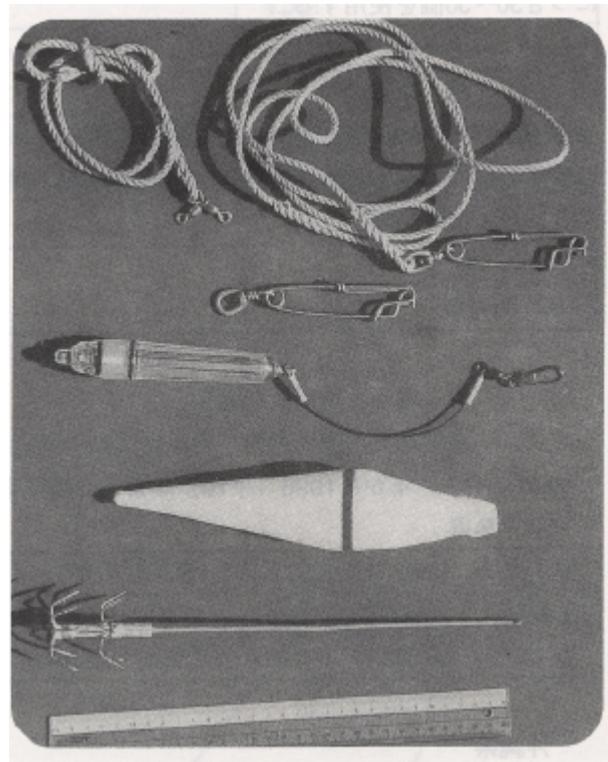
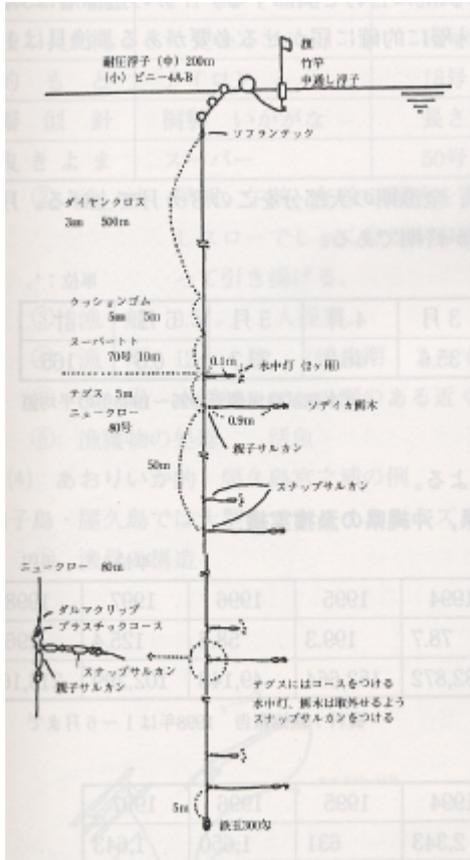


図2. そでいか旗流し釣り構成図

イ) 漁具資材構成 (1組分)

県水産試験場の調査漁具

名称	材料	規格・寸法	数量
道糸	ダイヤロンクロス	3mm	500m
枝糸	ニュークロー	80号	0.9m
釣針	擬似針30cm	いかな 10本 6cm返し付き 2段かな	3本
擬似(餌)	ビニール製	24cm×8cmの流形線型	3本
錘	鉄玉	300匁	1個
浮子	耐圧浮子	300mm×1個, ビニー-4A-8×3個	4個
クッションゴム		5mm	5m
水中灯	プラスチック絹布巻	電池2個入り・他取付付属品	いかな毎
中間道糸	ニュークロー-80号	50m	3條
枝糸部分	スーパーパート70号	10m	3條
釣取付部分	親子サルカン他	スナップサルカン, テグス他	3條

ソデイカは全世界に一属一種とされ、日本海但馬地方ではスルメイカなどを餌にして樽の浮き流し

漁法で漁獲する。沖縄、本県の大島近海では旗流し釣、延縄の漁法で漁獲しており、漁具は図2の通りである。

漁法

他の立縄釣と似るが、漁具の長さはその日の漁場の状況に合わせ調節する。イカの遊泳層は300~1,000mと深く、その範囲も広いので、ソデイカの遊泳層に的確に届かせる必要があ乱漁具は1隻につき30~50個を使用する。

漁船 3~10ト、1~2人乗り。

漁期

漁期は11月から翌年6月である。盛漁期3~5月で、全漁期の大部分をこの3ヵ月で上げる。月別の漁獲高は次の通りである。11月が漁期の始期、6月が終期である。

ソデイカの漁期

単位：ト

月別	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	計
平均漁獲量	7.9	14.6	7.1	13.2	35.6	46.2	33.7	6.5	165

水産試験場調査 1995~1998年の平均値

漁場 奄美大島近海

漁獲物 鹿児島県：釣 沖縄県：延縄による。

1990(平2)年から1998(平10)年までの鹿児島県、沖縄県の漁獲実績

鹿児島県

単位：ト 千円

年次	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
生産量	41.9	49.0	115.0	93.6	78.7	199.3	58.6	125.4	296.3
生産額	46,353	45,168	86,362	93,455	82,872	152,664	49,148	102,299	213,161

資料：漁協報告 1998年は1~6月まで

沖縄県

年次	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
生産量		574	978	1,415	2,343	631	1,650	1,643

資料：沖縄県水産試験場

(3) こういか曳釣⁴⁾ 野間池漁協の例

漁具の構造

漁具図、操業図は図3の通りである。

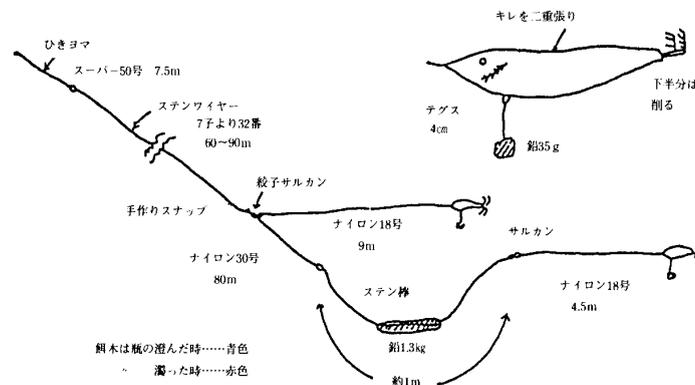


図3. こういか曳釣図

漁具資材構成表

名称	材質	規格・寸法	数量
曳索	ステンレス	7子撚り 32番	60~90m (60, 75, 90m)
本縄	ナイロン	30号	80cm
枝縄	ナイロン	18号	9 m 4.5m
釣もと	ナイロン	18号	4.5m
擬似針	桐製 いかかな	長さ16cm (手作り)	2個
曳きよま	スーパー	50号 7.5m	1

漁法 早朝, 午前, 午後の潮時を選ぶ。海底近くをクラッチで前進, ストップを繰り返してスローでしゃくりながら操業する。イカがかかると重くなるので大きくしゃくって引き揚げる。

漁船 3.5ト, 1人操業。

漁期 12~4月 (盛漁期3~4月)

漁場 水深30~40mの瀬のある近くの砂地。

漁獲物の処理 活魚

(4) あおりいか釣 屋久島宮之浦の例

種子島・屋久島では大型のアオリイカ(ミズイカ)が漁獲される。

漁具の構造

操業方法

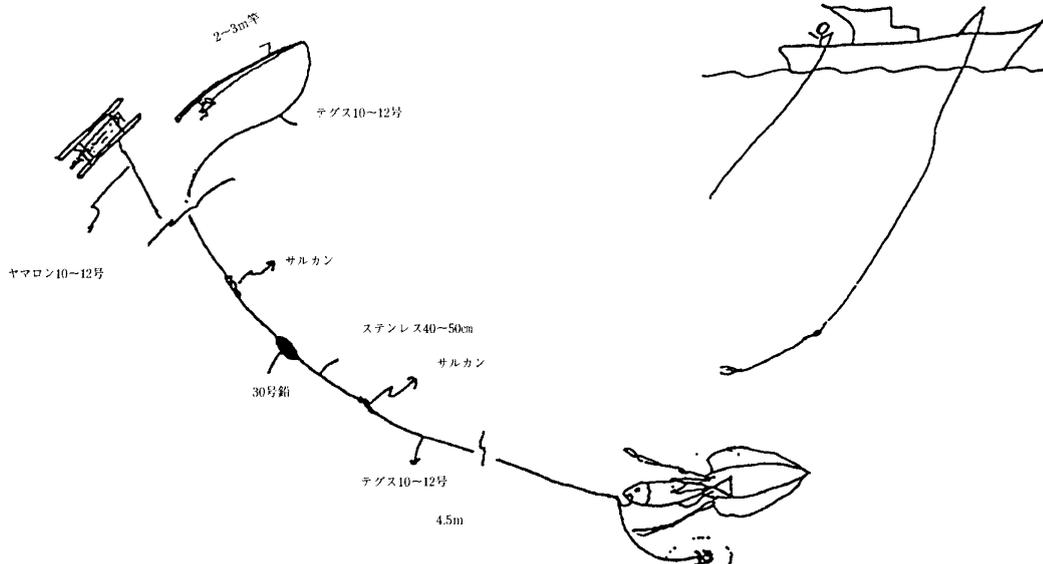


図4. あおりいか釣漁具図

道系: テグス10~12号またはヤマロン10~12号

天秤: ステンレス40~50cmに30号鉛を固定, 潮流の早いときは2個付ける。

ハリス: テグス10~12号 4.5m

餌: 活魚 ポラが良い。他にウミゴイ, タマガシラ, ムロ。死に餌もよいが, 食いは悪い。

漁法

漁場に着いたら、活餌を鼻掛けをして道具を海底まで下ろし、底に届いたら7mくらい引き揚げる。船は流し釣でイカの食いつきを待つ。イカが食い付いてどしんとした感覚がきたら、だましながら水面まで引き揚げ、引っかけて取り上げる。1人で2本道具を出すときは一本はリールを付けた短い竿を使用する。

漁場 水深20～50mの種子島・屋久島の沿岸水域。30m前後がよく釣れる。

(5) こういか刺網

漁具の構造

網地はアミランを使用し三重網とする。仕立上り24m。中細4本、網目9cm、25目掛、長さ50m、締結50%。外網は9本、30cm、5目掛、締結25%前後とする。

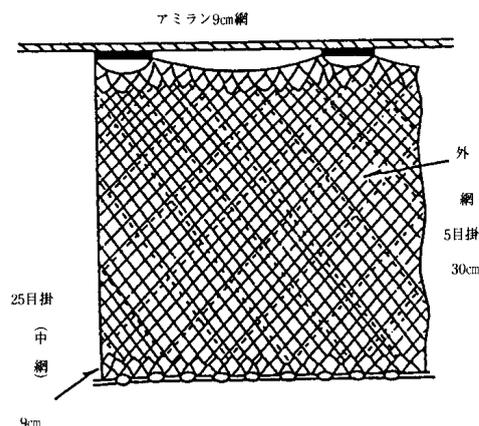


図5. こういか刺網図

漁法 コウイカは夜間接岸し、明け方沖合に移動する性質があり、これを利用して三重網を等深線に張りイカを絡ませて獲る。

漁期 3～5月、盛漁期4月

漁場 水深3～5mの岩礁地帯。

(6) こういか巣曳網⁵⁾ 鹿屋市漁協の例

漁具の構造

網は仕立上りで45m、深さ6mで網目4節を用いる。曳網15mを浮子方、沈子方に付ける。戦後は綿糸、シュロ綱、マニラロープであったが、現在では合成繊維となり、随所で操業されている。

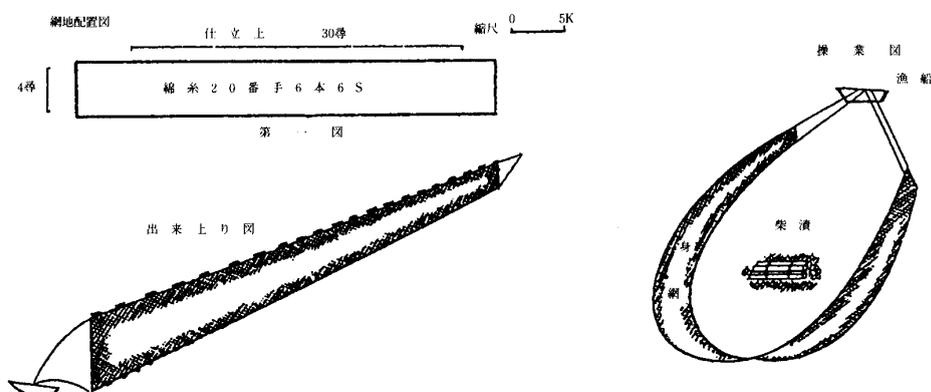


図6. 巣曳網の配置および操業図

漁法

コウイカの産卵漁場にあらかじめまさきや柴を葉付きのまま海底に敷設しておき、集まったイカを巣ごと巻き、その上に石を投げてイカを追い出し引き揚げて漁獲する。イカは沖合に逃げるので、網は沖側に設置する。

漁船 従来無動力船3~4名で操業したが、現在小型船2名程度である。

漁場 砂地の10m前後の沖合。

漁期 6~7月である。

(7) いかかご網

漁具の構造

この漁具は本県には随所であり、地区により資材、形状を異にする。イカが産卵のため藻に集まる性質を利用して木や竹で枠を作り、両端を開けて返しを付ける。その網籠の中心や返しに柴をつけ、卵を産みにきたイカを漁獲する。網の形状は下面を広くして安定させ、蒲鉾型や円筒型のものがある。材質も竹や木の他に鉄製、ビニール製がある。本県でも、元水産試験場員の永浜猛、四元賢治の努力で、鉄製、ステンレス製の材料で折り畳み式の籠網を考案して普及した。これを延縄式に、または単独に1籠宛設置する方法がある。その漁具を図示すれば次の通りである。

漁船は4ト前後で2人操業である。

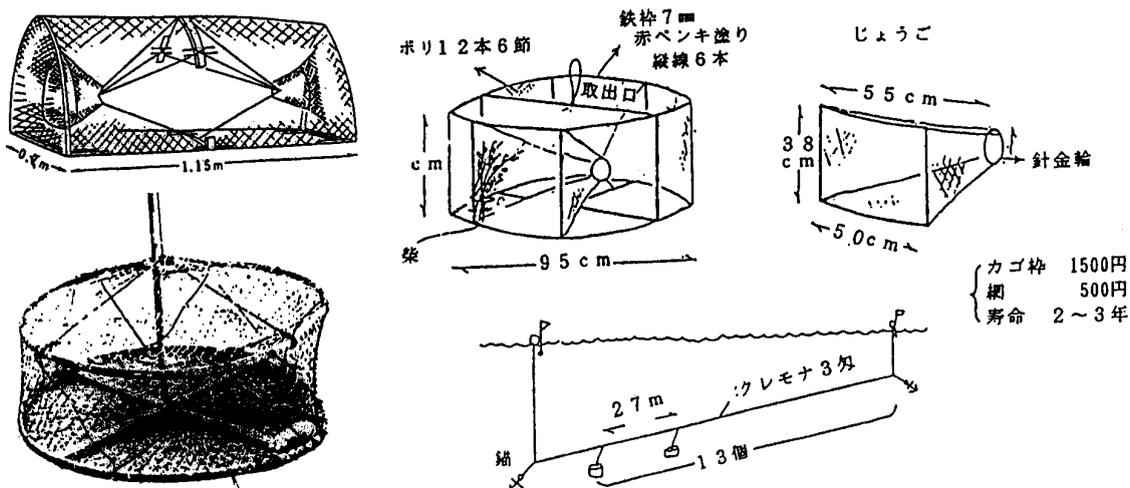


図7. いかかご網各種

漁法 漁具は一定期間、一定場所に置き、隔日または数日おきに順次揚げて漁獲する。

漁期 マイカ 4~6月、コウイカ(出水) 12~4月。

漁場 沿岸10~30mの砂地。

漁獲物 コウイカ、カワハギ、その他。

(8) 遠洋いか釣

沿革

大目流し網でカジキやサワラなどを対象に漁獲していたが、ウミガメやイルカの混獲の問題が叫ばれるようになり、全国的に撤退せざるを得ない状況となった。本県は串木野の漁船が1981(昭56)年、いか流し網として操業を始めた。北海道を基地に6隻前後が従事、スルメイカ、アカイカ、パカイカを対象にした。1984(昭59)年に漁獲量は2,962トのピークに達した。その後次第に減少を続けたが、

1994（平6）年遠洋いか釣で豪州近海に進出，アカイカ2,386ト、その他いか類651トを漁獲して現在に続いている。

漁 具

現在はコンピューター内蔵の左右舷別々の段差運転，しゃくり運動自由，測深機と連動など多彩な機能が備わる自動いか釣機を使用する。99ト型の漁船で20台前後を積む。

集魚灯は放電灯で，1灯3Kwを50個前後つけている。いか釣漁船も急速冷凍機を設置し，長期航海が出来るようになった。

漁 法

漁場に到着したら集魚灯を点灯し，シーアンカーを利用して船位を保ち，いか釣具が魚群に当たる深さを選定し，機械を設定させ終夜自動機で釣獲する。

漁獲物 遠洋いか釣の漁獲量は次の通りである。

遠洋いか釣漁船漁獲量 単位：ト

年 次		イ カ の 種 類		
西暦	年号	アカイカ	その他いか類	合 計
1994	平6	2,386	651	3,037
1995	7	1,167	910	2,077
1996	8		1,972	1,972

鹿児島統計情報事務所資料

3) いか漁業の問題点と今後の課題

(1) いか資源の問題

漁獲量

本県におけるいか類の漁獲量を5カ年の平均量で推移を見ると1974(昭49)年までは1,000ト内外であったが，その後次第に増加して1980年代(昭55～)は1,400トに達した。1976(昭51)年から農林水産統計にコウイカ，スルメイカ，その他いか類の仕訳が行われるようになった。いか類の増加の主な理由は本県で言う「アカイカ」の豊凶によるもので，ケンサキイカとヤリイカを含む大部分の「その他いか類」が数字を左右している。

漁業種別の漁獲量

1970(昭45)年には釣りによる漁獲がいか類総漁獲量の50%(360ト)を占め，定置網の漁獲は15%(100ト)にすぎなかった。1984(昭59)年には610トの漁獲があり50%を占めた。1996(平8)年現在359トで約26%である。近年の本県では定置網の漁獲が多くなっている。

海区別漁獲量

東シナ海に面した水域の合計漁獲量が大半を占め，定置網，まき網によっている。最近は奄美大島のソデイカが多くなっている。

漁期と資源

盛漁期が魚群の来遊期と考えられる「アカイカ」のうち，北薩ではケンサキイカが夏，ヤリイカは冬が多い。南薩のアカイカはヤリイカで，冬に全域に出現する。特に薩南海域や大陸棚周辺はアカイカ，スルメイカの産卵場として考えられ，重要な場所である。アオリイカは本県全域で古くからあり，主漁期は4～5月と9～11月である。コウイカは本県では6種が確認され，薩摩半島で4～5月と10～12月，大隅半島では11～4月に盛漁期が見られる。

単位：ト

鹿児島県におけるいか類漁獲量の推移

資料：九州農政局鹿児島統計情報事務所調査

年次	いか類			
	合計	コウイカ	スルメイカ	その他いか類
1965～69（昭40～44）年	856			
1970～74（同45～49）	992			
1976～80（同51～55）	1,399	329	65	1,204
1981～85（同56～60）	1,409	252	48	1,108
1986～90（同61～平2）	1,359	282	25	1,248
1991～95（平3～7）	1,267	237	60	967

注：5カ年の平均漁獲量の推移を見た。

単位：ト

漁業種別いか類漁獲量の推移

資料：九州農政局鹿児島情報統計事務所調査

年次	漁業種											合計
	底曳網	船曳網	巾着網	敷網	大型定置網	小型定置網	沿岸いか釣	その他釣	延縄	その他雑漁業	その他網	
1970（昭45）	87	37		1	54	62	368	18		78	81	784
1975（同50）	61	63	7	0	72	185	458	45		98	113	1,094
1980（同55）	65	84	50	2	147	436	543	36		63	170	1,610
1985（同60）	52	74	27		196	411	249	54		80	106	1,249
1990（平2）	71	90	34	9	226	621	242	127	227	55	137	1,383
1995（同7）	42	115	68	16	125	176	506	64		43	117	1,272

(2) 今後の課題

資源の問題

回遊性のアカイカ、スルメイカの類は海洋条件に影響されることが多いのでたゆまぬ研究が必要である。一方地先漁場ではコウイカの産卵柴の設置など、積極的な資源保護が必要である。

新漁場の開発

1990（平2）年から県水産試験場で開始したソデイカの開発調査は、奄美大島周辺の漁民に多大な貢献をした。今後も漁業者と連携した漁場開発が要請される。

いか漁業技術の問題

回遊性のアカイカなどの場合は定置網等によるので、漁獲の不安定をまぬがれないが、沿岸性のイカは旧来漁具も多岐にわたり、比較的簡易な漁具で操業出来るので庶民にもなじみ深い。「薩摩のいか餌木」はその代表例である。篤志漁業者の技術で支えられている面も多いが、遠洋を含めて新技術の発達は著しい。一方水産試験場では、水深1,000m前後の大島近海にソデイカの分布や周辺海域にトビイカの新しい漁場を発見した。今後未知のことも多いと思われるので、それに対応する漁業技術も合わせ開発が必要となる。

2. たこ漁業

1) 沿革

1988(昭63)年、指宿市の橋牟礼川遺跡から、たこつぼ型土器が見つかった⁶⁾。この土器は弥生時代(約2千年前)に登場し、古墳時代に大阪湾から瀬戸内海沿岸、北部九州におよんだと考えられる。指宿市が古来タコの好漁場であったことを示唆している。もっとも本県の史実の中に、タコの文献は少ない。繁殖用たこつぼを投入して有名になった鹿児島市の平瀬元市長に因んでつけた「平瀬だこ」、谷山の「一口だこ」、指宿市今和泉はタコの生産で有名であった。タコにはマダコ、ミズダコ、イイダコなどの種類がある。かつて谷山に多かった「一口だこ」はマダコの稚ダコを言っていたようだ。マダコの分布は広く、熱・温帯の海域に生息する。イイダコはマダコより小さく、卵が白く米粒状をしている。これを煮ると米飯を詰めたように見えるのでイイダコの名がある。有明海に多い。ミズダコは北方産で、鹿児島湾でも時々混獲される。

本県のたこ漁業は、明治時代の初めにたこ釣、竹つぼ⁷⁾、底面穴あきの素焼きのたこつぼ⁸⁾などの記録が見られる。竹つぼについては1967~1978(昭42~53)年の谷山沖合の埋め立てまで存在し、漁業者の敷地に放置してあるのを見ることができた。戦後間もなく行われたたこ網の調査記録によると手繰網に類似した漁具で、喜入、今和泉地区で操業され、かなりの漁獲を上げていた。タコの網漁具はこの地方独特のものといえる。従ってこの漁具の起こりはとんとこ漁具と同様と思われる。

戦後の網漁業としては手繰り網タイプのたこ網、たこ釣り、雑漁具として素焼きのたこつぼ、唐竹一節で作ったたこつぼなどが盛んであったが、1970(昭45)年代になり、鹿児島市ではコンクリート製のエサ装着の閉じ蓋式のたこつぼを使用した。その後、プラスチック製のたこつぼに変化している。長島沿岸ではたこつぼから網籠による漁具へと変わった。指宿市岩本ではたこつぼ、たこ籠による方法と船を走らせながらひっかけの釣でタコを釣る方法がある。このように漁法が地域でまちまちで、独特の発展をしている。

現在たこ漁業の中心は、北薩では長島周辺、阿久根市、出水市である。鹿児島湾では鹿児島市、桜島町および指宿市、喜入町、山川町となっている。

たこ漁業は漁業制度上は漁業権漁業で、繁殖保護のため産卵用のたこつぼを設置している。

2) たこ漁業技術の発達

(1) 旧来の漁具漁法

たこつぼ漁業

たこつぼはタコが穴に潜む性質を利用したもので、つぼの形や大きさ、魚体の地域差、タコの種類などで異なる。本県にはマダコ、イイダコがいるが、出現の時期に合わせて大きさも異なり、地域により材質も陶器つぼ、竹製とそれぞれ異なる。全国にはつぼの底には水を通す穴のあるもの、塞がっているものがあるが、本県では開いているものが多かった。

ア．マダコつぼ

多くはたこつぼ製造所に発注して作らせる。つぼの径10~15cm、長さ22~14cm。1,000m前後の幹縄に50~100個使用して一連とする。海底に3~5連投入して2~3日置きに揚げていた。鹿児島市の谷山ではマダコの稚ダコ取り用に唐竹を使った。一節を残して30cm前後に切り、マダコと同じ要領で漁獲していた。

イ．イイダコつぼ

マダコつぼの漁法と変わらない。体が小さいのでつぼも小さくする。5~6cmの径で、10~12cmの長さの陶器製が主に使われる。貝殻、竹筒なども使われる。

たこ網漁業

たこ網の存在が考えられる。戦前に着いては文献が見当たらないので、戦後の項を参照のこと。

たこ釣漁業

1885(明18)年の記録⁹⁾にある。かなり古い時代から存在したと考えられる。タコが餌取りにきたところを要領良く引っかけるのがこつで、漁具はかなり堅固である。餌も取られにくいフカなどが利用される。

(2) 戦後のたこ漁業

たこ雑漁業

伝統的なたこつぼ漁業を基本にして、最近に入った絶対逃げることのできない、俗に「地獄壺」と称する有蓋式たこつぼや籠網が工夫され、普及した。

ア．有蓋式たこつぼ 鹿児島市漁協の例

鹿児島市では陶器製の有蓋式たこつぼが1970(昭45)年代から使われており、最近は硬化プラスチック製有蓋式たこつぼに改良された。

ア) 漁具の構造

(ア) たこつぼの構造

従来使用していた陶器製のたこつぼで、入口に入ったタコがカニ等の餌を採ろうとして動かすとき、落とし蓋が作動して逃げられないようになっている。これは山口県で硬化プラスチック製に改良工夫され、製品化されている。

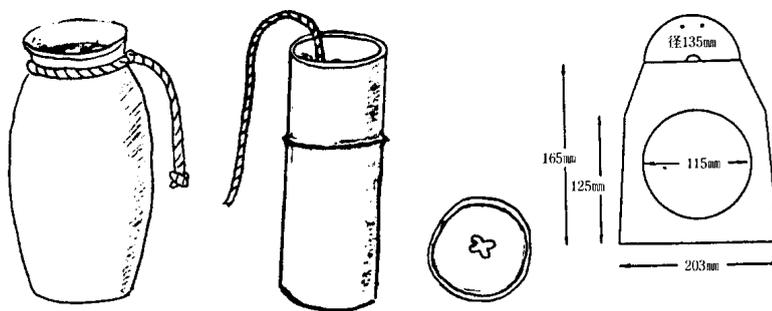


図1. たこつぼ各種

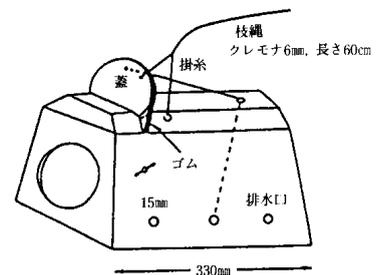


図2. 有蓋式たこつぼ

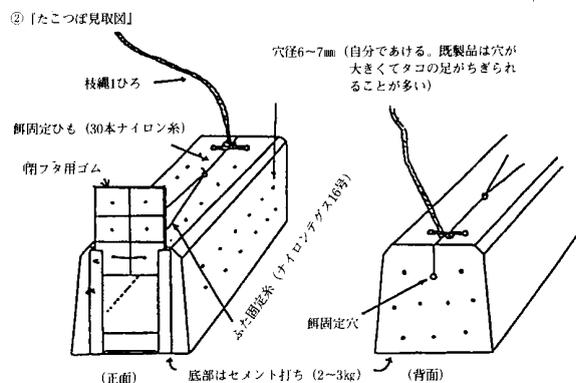
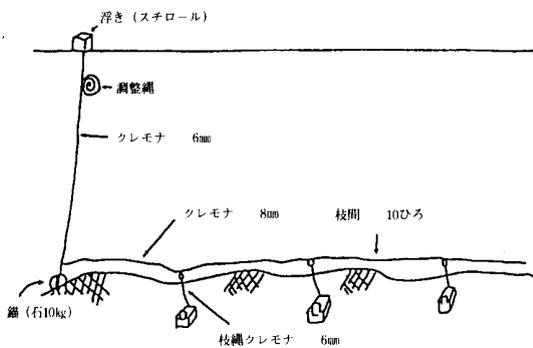


図3. 操業図

(イ) 漁具構成 (1連当たり) 1995年

名 称	材 料 及 び 形 状	数 量	備 考 (資 材 単 価)
浮 縄	混合ロープ 6mm (100m×2)	200m	1巻4,000円
延 縄	混合ロープ 8mm (200m×4)	800m	1巻7,000円×4
枝 縄	混合ロープ 5mm (2m×50)	100m	1巻3,000円×0.5
たこつぼ	硬化プラスチック製有蓋式たこつぼ	50個	1個800円×50個
餌固定ひも	クレモナ糸 (20本)	1巻	1巻400円
ふた固定糸	ナイロンテグス (20本)	1巻	1巻1,150円
そ の 他	セメント・ゴム等 (50個)	1式	1個100円×50個

イ) 操業方法

1連に50個のたこつぼを12m間隔に固定し順次投縄する。揚縄は4~5日おきに行う。水深は漁期により異なるが10~60m。一般には30~40m。

ウ) 餌 料 餌は生きたカニやカラス貝

エ) 漁 場 共同漁業権漁場で水深10~60mのところ。海底に障害物がない砂地が良いとされる。

オ) 漁期, 漁獲高 タコはほとんど周年漁獲されるが, 九州沿岸ではマダコは夏期, イイダコは冬から春にかけて多いとされる。特に夏期雷鳴の激しい時が良いと古くからいわれるが, 理由は明らかでない。鹿児島湾では6~8月が盛漁期である。この時期一船あたり400~700kg/月の漁獲で, 年間で2~3.5トになる。6~8月は値段が安くなる。

カ) 資源管理

有蓋式のたこつぼの出現は漁獲能率を増加する一方で, 資源の枯渇に拍車をかける。鹿児島市漁協ではタコの産卵期の10月1日から50日間を禁漁期間に設定している。またたこつぼ投入数を1隻あたり400~500個に制限している。さらに産卵用たこつぼを毎年8月に2千個投入し, 積極的に繁殖保護に努めている。

イ. たこ籠漁業 阿久根漁協の例

ア) 漁具の構造

この漁具は阿久根, 長島, 指宿で最近になって普及した漁具である。市販の折り畳み式の多目的籠で, 形状は図4の通りで1個1,500円程度。

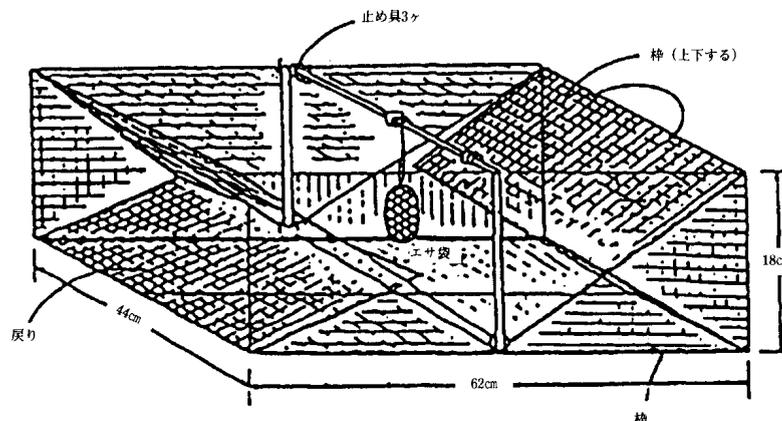


図4. たこ籠網の構造

イ) 漁具資材 漁法とも延縄式で、たこつぼの資材と変わらない。

ウ. たこ釣漁業

ア) たこ一本釣 長島の例

歴史の古いもので、1955年代(昭30~)に最も栄え、最近は廃れてきた。

漁具は図5の通りである。

(ア) 漁具構成

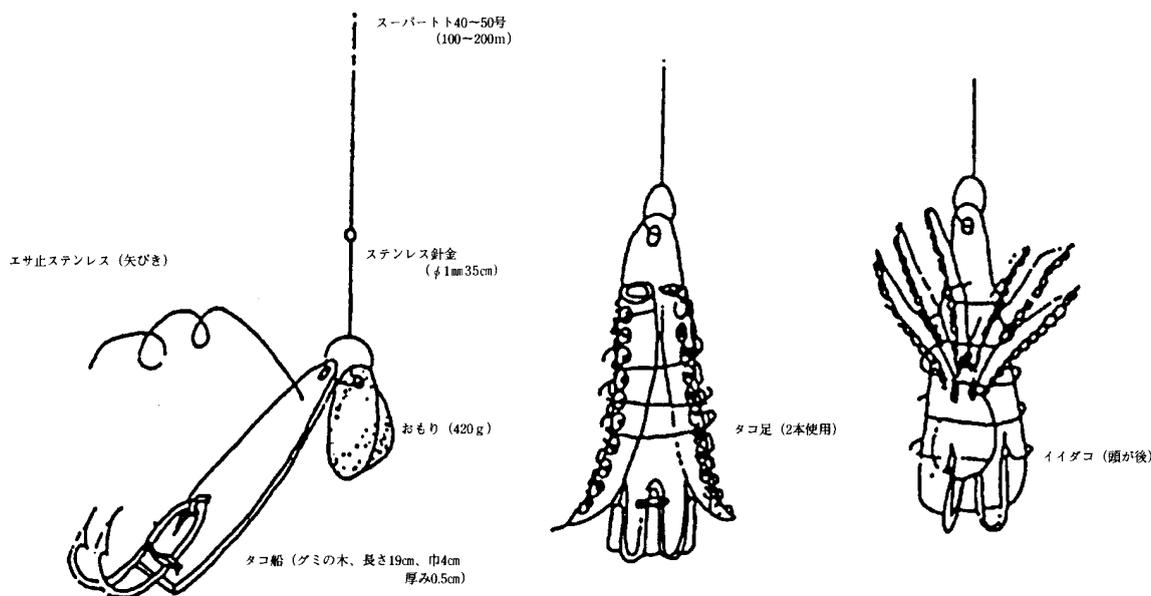


図5. たこ一本釣

漁具構成

名称	材質	規格・寸法	数量
道糸	スーパートト	40~55号	100~120m
台座連結糸	ステンレス針金	径1mm	35cm
たこ釣針		タコ掛け針 二本爪 自家製	1個
タコぶね	グミの木	自家製 長さ19cm幅4cm	1個
錘	鉛	自家製 420g	1個
餌巻	ステンレス	極小 矢びき	25cm

(イ) 漁法

早朝出港。漁場では船を流しながら釣る。タコの当たりがきたらしばらくそのままおき、重さを十分感じたら一気にたぐり揚げ、釣り糸を緩めないようにする。漁具は2つ用意し交互に揚げる。

(ウ) 漁期 4~9月 盛漁期: 5~6月。

(工) 漁場 長島町沖 水深60~70m 底質: 瀬 砂礫層。

(オ) 漁船 1.5ト 乗組員1人。

(カ) エサ タコ足 イイダコ ベラ(二枚おろし)。

(キ) 漁獲物処理 活魚で市場出荷。

イ) たこ曳釣 指宿市岩本¹⁰⁾の例
 (ア) 漁具の構造

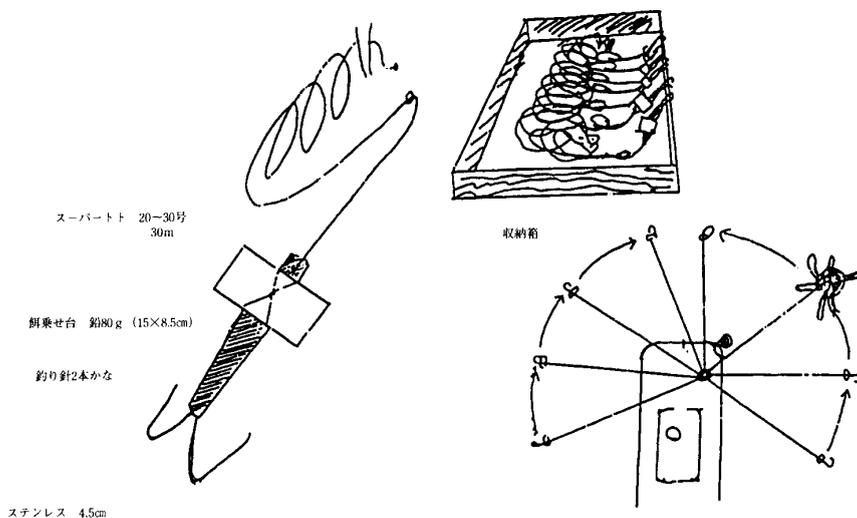


図6. たこ曳釣の構成操業図

漁具の構成

名称	材質	規格・寸法	数量
道糸	スーパー	20~30号 20m	8本
台座連結糸	テグス	18~20号 30cm	8本
餌乗せ台	プラスチック	2.5×4cm	8枚
錘兼たこ舟	鉛	15×8.5cm 80g	8個
釣り針	自家製 ステンレス	径1.5mm 4.5cm 2本爪	8個
鯛巻	ステンレス (矢びき)	25cm	8本

(イ) 漁法

出港前に予め釣具にエサを装着して準備しておく。漁船は、漁場ではスローに航走し、用意した漁具を船尾の真横から次々に遠く投げ入れる。タコをこの漁具の動きに反応させるためにゆっくりと走らせるのである。タコがエサに乗ると、道糸に重みがかかるので強く引いて引っかける。釣れたタコを外し、再び投下する。船速が漁獲に影響するので、船足を抑えるために鉄製約10kgの錘を船尾から下ろして海底を引きずるようにする。

(ウ) 漁期 4~9月 (盛漁期 5~6月)である。

(エ) 漁場 水深8~10m 底質 砂。

(オ) 漁船 1~2ト 一人乗り。

(カ) エサ サメの切り身, カツオの腹皮。漁具の板状の部分に針金で括る。

(キ) 漁獲物 活魚処理

たこ網漁業

指宿, 喜入地方の漁業である。喜入町の網の例 1952(昭27)年ごろ 図7の通り

ア. 漁具の構造

袋網, 袖網, 曳網からなる曳網で, 沈子は海底に着き, 浮子は水中に在るように浮力を持たせる。袋網には「返し」も「天井網」もない。

ア) 袖網 綿糸網6本合，22節，100目掛2.1m～4.2mの長さのもの24反を縦目に使用して，縮結で29mに仕上げて片袖網分とする。

イ) 袋網 綿糸網6本合，22節，100目掛，7mの長さのもの6反を使用する。袋尻は同網地3反を使用する。

ウ) 浮子網，沈子網 シュロ綱6mm，長さ30.5mのもの4條を使用する。

エ) 曳網 藁縄径12cm，長さ105mのもの2條を使用する。

オ) 浮子，沈子

浮子はうるし材を使用。長さ21cm・幅9cm・厚さ1.5cmの板状にして57個を使用。沈子は陶器製40gのもの2,000個を使用。

イ. 漁法 漁法的には沖手繰網漁業と全く同じであり，図8の通り。ただ夜間操業である。漁船は，無動力船で，2～3人で操業していた。

ウ. 漁場 喜入町沖合，水深10～20mの砂泥質の海底。

エ. 漁期 3～10月。盛漁期は6～7月。

オ. 漁獲物 タコ，雑魚。

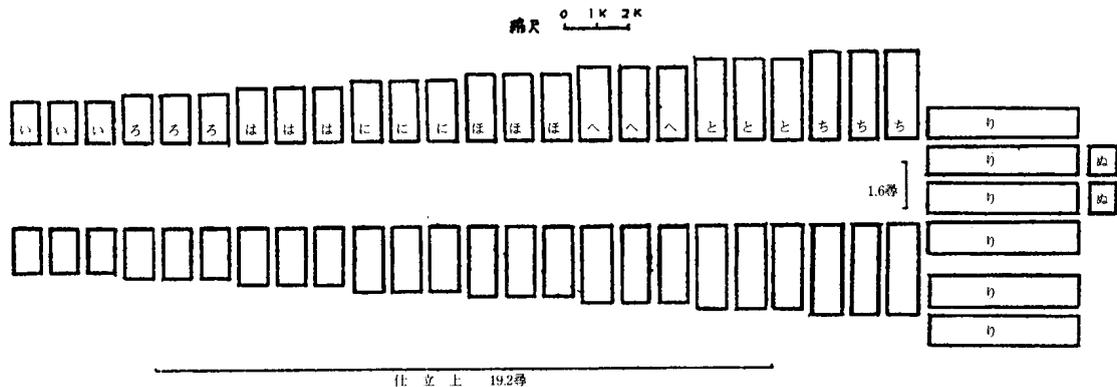


図7. たこ網構成図

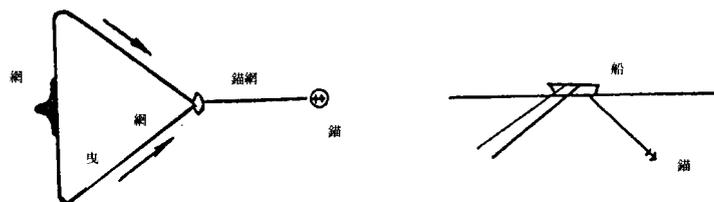


図8. たこ網の操業図

3) たこ漁業の問題点と今後の課題

(1) たこ漁業の問題点

タコの資源の問題

タコにはマダコ，ミズダコ，イイダコの価値の高い魚種があるが，そのうち特に重要なのはマダコであろう。本県におけるたこ類の漁獲量は1963（昭38）年前後，約600トあったが，現在は300トに半減している。

漁業種別に漁獲を見るとたこつば，たこ籠の割合が高く，たこ釣り，底曳網，船曳網の順であるが，推移を見ると総体的に減少がみられ，特に船曳網，たこ釣りの減少は顕著である。たこ釣りでは15%まで減少している。

海区別に漁獲量の推移をみると，漁場の中心は，北薩の長島周辺，鹿児島海区の鹿児島市，指宿市

沖合である。鹿児島海区が埋め立てや漁場汚染によって漁獲量が減り、北薩海区と割合が逆転している。全体的に資源の減少が目立つ。

たこ漁業別漁獲量 10年毎平均量の推移

資料：九州農政局鹿児島統計事務所 単位：トン

年次別	年号	計	底曳網	引き寄せ 船曳網	刺網	小型 定置網	タコ 釣り	その他 漁業
1964～1965	昭39～40	585	12	38	1		205	329
1966～1975	41～50	225	9	8	3	1	82	122
1976～1985	51～60	286	10	1	13	4	70	189
1986～1995	昭61～平7	306	7	5	13	4	31	244

たこ漁業海区別 10年毎平均量の推移

単位：トン

年次別		海 区					
西 暦	年 号	計	北 薩	南 薩	鹿児島	熊 毛	大 島
1971～1975	昭46～50	183	76	6	96	1	4
1976～1985	51～60	285	141	7	110	2	25
1986～1995	60～平7	306	155	8	116	7	20

注：この年次は5年間平均

資料：九州農政局鹿児島統計事務所

漁業技術の問題

古くから引き継がれてきた釣漁業が激減をたどっている。これは漁業の一般性がなく、かつ漁業後継者が育たないところに問題があろう。たこつぼ、たこ籠漁業では、有蓋式のプラスチック製たこつぼの普及、簡易なたこ網籠などで漁獲量を伸ばしている。最近のたこつぼとたこ網漁獲量を例示すれば次の通りである。

たこつぼ、たこ籠の漁獲量 指宿市岩本漁協の例

1992(平4)年

漁業種類	数量 トン	金額 円	単価 円
たこつぼ	149.2	229,075	1,535
たこ籠	17,171.8	9,750,531	568

東町漁協における自主的な資源保護の問題

タコの資源は盛漁年の半分までに落ち込んでいる。東町漁協では、資源保護と経営合理化のために1995(平7)年から10月を禁漁期としている。結果は図9、10、11のとおりで禁漁の月があるにも拘わらず年間漁獲量は漸増してきている。

(2) 今後の課題

タコの資源減少を防ぐためには環境の保護、漁獲制限などの先進地の例がある。漁獲に対しては漁場、漁期、漁獲方法、漁獲物の大きさの制限などが考えられる。鹿児島市では漁協と協力して産卵つぼを投下して繁殖に努めている。

漁業者が自主的に禁漁期や体長規制などをして漁獲量の増加を図ることを期待すると共に積極的に産卵つぼなどを設置して繁殖を図る必要がある。

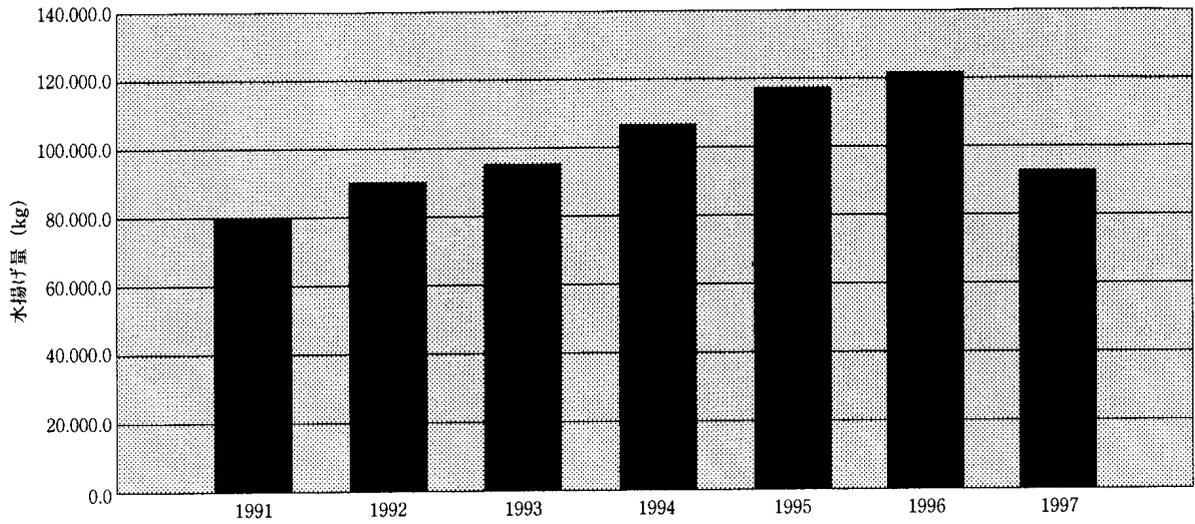


図9. たこつば, たこ籠による東町漁協漁獲量 (1997年は4~8月計)

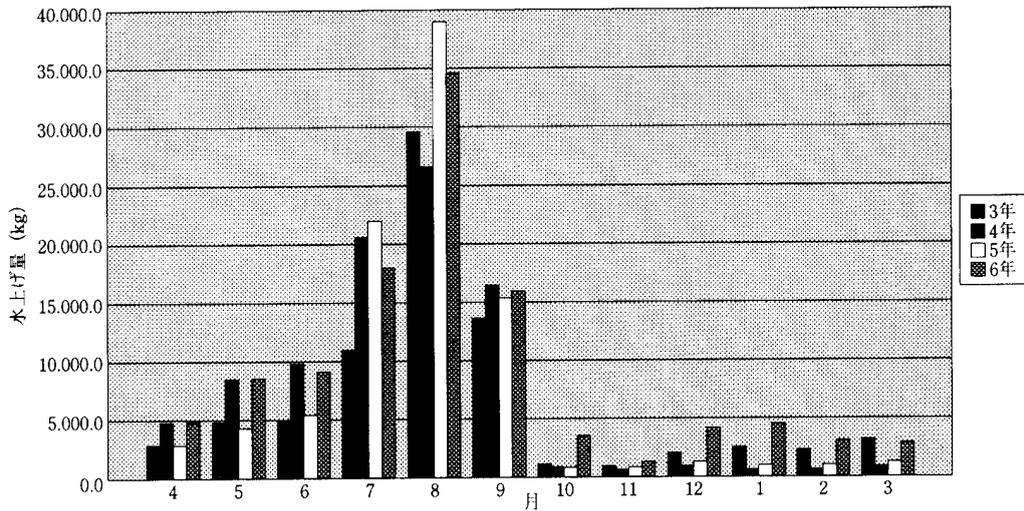


図10. 産卵設定前の漁獲量 (1991~1994年: 管理前)

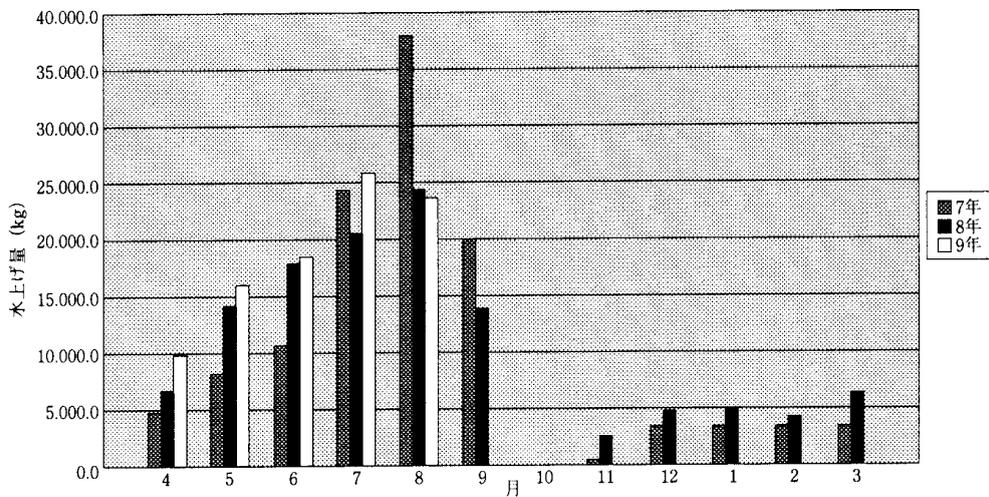


図11. 設定後の変化 (1995~1997年: 管理後)

4. 参考文献

- 1) 奈須敬二 (1991) : いか釣漁業における漁具・漁法の発達, イカ. 成山堂, 136~192.
- 2) 鶴田・徳留 (1987) : 鹿児島県沿岸で漁獲されるイカ類について, 南西外海の資源・海洋研究, 第3号 49~55.
- 3) 鹿児島県 (1883) : いか釣各種, 鹿児島県漁業説略, 6, 8, 10 説. 58~65.
- 4) 鹿児島県 (1987) : こういか曳縄漁業, 鹿児島県の漁具漁法図集, 127~128.
- 5) 鹿児島県 (1953) : いか巢曳網, 鹿児島県漁具図譜, 87.
- 6) 南日本新聞 (1998) : 源流上野原「潮風の記憶」, 4月1日文化欄.
- 7) たこつば (1910) : 特殊漁業, つば類, 日本水産採捕誌. 166~167.
- 8) 宮本秀明 (1949) : タコ漁業, たこ壺 水産講座, 漁業編, 5巻. 29~31.
- 9) 鹿児島県 (1883) : たこ釣り, 鹿児島県漁業説略, 13 説, 67.
- 10) 筆者聞き取り (1999) : たこ引っかけつり漁具, 岩本漁協, 高田逸男より.

(福元 覚)